

2003/03/31

2003年3月31日 日本テレビ 定例会長社長記者会見

(要旨)

1. 民放連会長退任に当たって

Q：先日も会見がありましたが、最後に当たって一言お願いします。

氏家齊一郎CEO会長：

私が就任した7年前までは、民放連は一種の仲良しクラブで、業界の親睦として運営されていたが、時代の流れとともに大きく様変わりした。社会的な批判とか、社会的な攻撃をテレビ業界は直接受けるようになったわけです。それと同時に最大の問題であるデジタル地上波および衛星波におけるデジタル放送の問題がいよいよ具体化することになってきて、業界としては大きな問題になったわけです。そういう点で、力はなかったと思いますけれども、ある程度自分では最大の努力をしたと考えています。

今後は益々、大きな荒波の中に飛び込むことになりますから、日枝新会長を支えていこうと思います。それと同時に民放連に所属する民放各社の経営者の皆さんのが、こういった問題は民放各社がそれぞれの立場で全力を尽くしていく限り、政府頼みだとか、キー局頼みだとか、ネットワーク頼みという形ではもはや成り立ち得ない状況が発生していると思いますので、皆さんもこれまでに増した経営努力が必要とされると思います。

記者：遺り甲斐のある7年間だったのはないですか。

氏家会長：僕も乱世を好む方だから、個人的には遺り甲斐がありましたよ。

2. 9年連続年祖四冠王獲得の勝因分析と、新年度の見通しについて

萩原敏雄COO社長：

おかげさまで先週をもって年度の四冠王が9年連続で獲れました。四冠を支えた大きな要因としては、1つにはやはり全日視聴率を支えた「ズームイン!!SUPER」から「ザ・ワイド」に至るまでのワイドーショーが依然として安定的な高視聴率をとっているということ。さらに、「ニュースプラス1」が、

キャスター変更に伴って、回復したということですね。

それからゴールデン、プライムに関して言うならば、大きな意味でのバラエティが非常に好調な何本かの柱が立っているという状況が依然として続いているということ。これがやはり四冠王の大きな要因になったと思います。

ドラマに関しては残念ながらこの1年間、「ごくせん」を除けば、これはというヒット作になかなか恵まれなかったんです。殊に1月～3月は非常に低迷した枠があったというような状況でした。場合によっては命取りになりかねない状況でしたが、連続ドラマが各局ともに伸び悩んだ中、枠も少ないということもあり、まわりが我々をはるかに上回る数字が獲れていたわけではないということで、我々の今年度弱点になったドラマが、他局と比べて命取りにならずに済みました。これははっきり言うと敵失といつてもいいかもしれません、そういうことにも恵まれて、むしろ昨年度よりもわずかではありますけれども、2位局との差を広げて年度がとれました。

特に当面のライバルということで、この9年間ずっとターゲットにしておりましたフジテレビが、ここへ来てかなり数字を落としている状況もありまして、現実に年度でもゴールデンではTBSが2位局、そういったライバル関係の変化も、逆に私どもには利したのかなと思います。

もちろん1月～3月に、例えば「箱根駅伝」の高視聴率、「千と千尋の神隠し」の驚異的な数字等、そういうものにも恵まれました。最終的には「千と千尋」がだめ押しした感じで、無事に年度がとれたということだと思います。

今後の見通しですけれども、当面は年度よりも年間というものを一番最優先に考えてありますから、現実には1月から既に3ヶ月を経過し、1年の4分の1を経過しましたが、これに関しましても、昨年に比べてほぼ同じような差をもって四冠で4月を迎えられます。1～3月で差をなるべくつけて4月に入り、9月終了段階ではほぼ年間がとれることが見えるという状態で、10月改編は来年に向けての編成というのが私どもの基本的な戦略ですと来てあります。

そういう意味ではこの1月～3月は、計算通りという感じです。先ほど、年度で「千と千尋」がだめ押しをしたと申しましたけれども、今度年間で考えるならば、「千と千尋」がいいスタートダッシュの起爆剤になったと考えてもいいかもしれませんですね。

あとは4月以降、巨人戦がバックアップになるのか、足を引っ張ることになるのか、その辺のところが4月～9月の戦いの大きな要因になることは事実ですけれども、巨人戦も私どものシミュレーションとしてはそれなりの数字を見込んでおりますので、順調に当初の予定どおり、大体9月で四冠が見えるような状態になればいいなと考えています。

3. 巨人軍開幕3連戦中継の手応え

記者：巨人戦の開幕3連戦、ちょっと苦戦展開ということもあって、伸び悩んでいるようですけれど。

萩原社長：1つは、去年は巨人・阪神で、しかも土・日の2連戦でした。それからその前の年は金曜日からですが、これもやはり巨人・阪神でしたが、金曜日の巨人・阪神に関しては20%台は出ていません。去年は非常に阪神と星野監督が注目されて、その開幕カードでしたから、この数字というのはかなり高い数字と見ていいわけです。

今年の中日戦は、3戦とも最初の方で大差がついた。これは、野球中継の視聴率上非常によくですね。確かに昨日は後半で追い上げ10対9までいっているのですが、ともかく8対1の段階で諦められたケースがかなりあると思います。昨日の場合、いつもは悪いはずの6時～7時が19%あります。それが7時からだと15%になってしまします。ということは、木佐貫が出てきてかなり注目されて、見ようという人たちがたくさんいたんだと思うのですが、7時には既に彼はいなかったというような状態で、その注目のルーキーが打たれ、大差がつくというような非常に展開が悪かった。それから土曜日は勝ったにはいいんですけど、11対0というのはいくら何でも勝つにしても大差がつきすぎたとか、いろいろこの3連戦は、テレビの視聴率的にはいい展開とは言えなかったということがあったと思います。

ただ、ジャイアンツもそれなりに新戦力が出てきているし、大したことないかなと思った中日が、あのセンターのバックフォームだけでも十分見られるという見所が今年のプロ野球でもあれば、数字自体は今回の数字がすべて物語っているとは思いません。

もう1つは、イラク戦争の影響というのが全くなかったとは言えないと思います。やはりスポーツ新聞各紙も含めてイラク報道がかなり大きなスペースを占めておりましたので、いよいよ開幕という感じになるには、まして大リーグが来るはずが、戦争のおかげで来られなくなったとか、待望の開幕ということにちょっとなりにくかったというようなことも影響はしたと思います。11対0でもこの数字が出るというふうに考えれば、そんなに心配しなくていいんじゃないかと見ています。

記者：松井、清原がいなかつたという影響はどうですか。

氏家会長：もうちょっと分析しないとわからないんだけれど、あまり出でていな

いんじゃないかな。新しいスターに期待するという点が強いんじゃないかと思うんだね。だから、木佐貫が5回ぐらいまで持てば、あと3%ぐらい上がったね。

記者：先ほど今年もそれなりの数字を見込んでいるとおっしゃいましたけれども、具体的には。

萩原社長：去年の平均視聴率が16.2%ですね。だからそれぐらいの数字はとれると見ています。シミュレーションというのは、なるべくキツめキツめに踏んで、それでも勝てるというのが狙い。そういう意味で、去年並で計算するのが常識だろうと思います。ペナントレースが相当激烈になると思いますよ、今年の場合は。阪神や、中日も結構強そうですから、去年はやや独走でしたが、その辺で後半の盛り上がりも期待できるのではないかと思います。

4. イラク戦争報道でこれまでの総括と事業への影響

萩原社長：報道の姿勢としては、どうしても戦争みたいな話になると、何か興奮状態になって、情緒的に流れる恐れがある。これをとにかく避けること。それから、両方の情報操作、いわゆるプロパガンダに惑わされないということ。当面、この2つの問題をきちんと踏まえた客観報道を基本姿勢にしています。同時に、やはり取材する側の安全と、それから当たり前ですが人命尊重ということを最優先に考えて、局の幹部を最前線のカタールに配して、そこで安全確認も含めて仕事をしております。

そういう中で、いくつかの特徴的な成果を上げました。

1つは、開戦の空爆開始のときに、10時半から報道特番を組んで、それにつながったニュース枠「ニュースダッシュ」で、バクダッドにおりました佐藤和孝さんから「今空襲警報が鳴っています、何か落ちたようです、音がします」と、同時中継のTNG動画で生々しく、その瞬間を伝えることができました。

他社の場合は、一種のお天気カメラみたいな固定映像ですが、我々の場合はTNGを使いましたので、動く映像でそれを伝えることができたということ。

引き続き、もう1人山本美香さんというリポーターがやはりバクダッドから「火が上がった」と、生々しい画面で伝えることができました。

それからもう1つは、今泉浩美という女性記者がアメリカの第3機械化歩兵師団に従軍記者として参加し、現在バクダッド120キロのあたりまでずっとついてきております。女性記者は世界的に言えばゼロではありませんが、日本のメ

ディアでは唯一の存在であります。彼女はその第3歩兵師団がイラクに向かって砲撃を開始する瞬間に、生の映像で中継リポートすることができました。

そのような訳で、佐藤さん、山本さんという両リポーターの方にカメラを持っていただいていること、今泉がアメリカ従軍で進んでいることで、他局にはないよう映像およびリポートをお送りできているという自信を持っております。

とはいものの、早く終結に向かってほしい、取材する側としてもそういう方向で進んでほしいと思います。

記者：安全管理をどうキープしようと考えているか、また従軍の是非について議論あったかどうか。

萩原社長：女性ですか。

記者：男女問わず、従軍記者を派遣させるか否かという議論は。

平林邦介執行役員：

安全基準は作っております。とにかく自分の命と体の安全を最優先し、状況判断することがまず第一です。

戦争という報道のあり方として、どうしても大本営発表とか、一方的な情報があるわけです。特に今回はアメリカ軍から、プール取材は認めない、ユニを認めるという方針が出ておりました。戦争報道の一環として、実際、記者が現場で戦争をどう見るか、アメリカ軍の保護の下にあるならば今泉の派遣を認めようという事になりました。

5. 消費者金融CMの今後の取り扱いについて

記者：消費者金融のCMについて、民放連のガイドライン出ましたが日本テレビとしての今後の対応は。

氏家会長：あのガイドラインに従ってやっていこうと思っています。

記者：時期としては。

氏家会長：まだ確定していないのが時間の問題についてです。いわゆる消費者金融6社と銀行系カード金融会社3社というのは、合法的に認められている営

業組織だから、それを社会的な影響があるからということでシャットアウトするということは、法律的に正しいかどうかという議論はあった。

例えばこれはタバコと似ている。タバコの場合も、吸うことは法律で禁止されていないが、社会的に禁止されているという形がある。そのように考えますと、タバコの場合もタバコ会社との話し合いであのようした。

ですから、今度も消費者金融各社と話し合いで、メディアと消費者金融、代理店の三者で話し合って、一番社会的にも落ち着く場所を決めたら良いのではないかというのが最初からの私の指導方針だった。それに基づいて非常によくやってくれましたよ。それがあのような形で一応まとめて、あと半年くらいかけてさらに詰めていくということです。

記者：時間の問題を今後話し合っていくようですが、民放連として一律にルールを作るというのは、どうですか。

氏家会長：民放連がルールを作っても強制力はありません。民放連の構成各社がどう思うかです。そういう意味で、構成各社と消費者金融各社がそれぞれ納得できるところで、消費者金融各社も社会的批判が猛烈に今後高まって、俺たちは闇金融と違うということで、同じ扱いにされるのはけしからんとか何とかといつても、社会的にそのようになってくれば、当然対応しないわけにはいかなくなる。現実にPTAなどの調査で、非常に強い要望が出されています。そのようなことも全部加味して考えるべきだと思っています。

6 .「千と千尋の神隠し」アカデミー賞受賞の感想と 今後の映画事業への取り組み

記者：次に、「千と千尋」のアカデミー賞受賞についての感想を

萩原社長：それは大変嬉しいですね。日本映画としての快挙だし、本当に世界に誇るべき作品であると思っています。ただこういう戦争中で、宮崎監督のコメントにもあるように、本当に素直に喜べれば、もっと良かったなというのが正直な感想です。「風の谷のナウシカ」以来のお付き合いが、ついに花を咲かせたという感じを持っております。今後ともこれを機会にさらに連携を強めて、もっといい作品、大ヒット作を作りたいと考えております。

今回、宮崎監督が渡航しなかった理由の1つになっている、来年公開される「ハウルの動く城」も、これは相当面白いです。場合によっては奇跡と言われた「千

と千尋」を上回ることも無いとは言えないぐらい、非常に卓抜した作品になると思います。

映画事業に関しては、もちろんジブリとの関係は、今後とも益々緊密にしていきたい。最終的には映画ですけれども、それ以外の部分でも、例えば会長が館長を務められている現代美術館でジブリ展をやるなど、そういうイベント関係でも連携を強めていきたいと考えております。

以上